

# Unit C2 HELP or HELP to: what do corpora have to say?

7413104

言語文化学部 マレーシア語科3年

山崎加奈

# 目次

1. 導入(Introduction)
2. コンコーダンス (Concordancing)
3. 言語多様性 (Language Variety)
4. 言語変化 (Language Change)
5. 間の名詞句 (an Intervening NP)
6. HELPの前の不定詞 (the Infinitive Marker Preceding: HELP)
7. 受動態 (the Passive Construction)
8. まとめ(Summary)

# 1. 導入(Introduction)

この事例研究の目的:

- 4つのコーパスと統計学的有意差検定を用いた、HELPに伴う不定詞の種類分析から、以下の2つの方法を示す。
  1. MonoConc Pro.を使用した調査方法
  2. コンコーダンサーから得られた頻度データを、SPSS for Windows(統計パッケージ)を使って解釈する方法

## 2. コンコーダンス (Concordancing)

### 調査方法

- 4つのコーパスから、4種類の不定詞の頻度を算出する。
- LOB(BrE 1960), FLOB(BrE 1990), Brown(AmE 1960), Frown(AmE 1990)
- help to V / help NP to V / help V / help NP V
  
- 頻度の違いが統計的に有意であることを明らかにするために、統計学的検定を行い、頻度を解釈しなければならない。
- 比較するコーパスサイズが異なる場合は、統一しなければならない。

### 3. 言語多様性 (Language Variety)

- 目的: American English(AmE)とBritish English(BrE)の違いを調査する。
- Onions(1965), Lind(1983), Biber(1999):  
原形不定詞は、BrEよりAmEにおいて頻度が高い。

#### 調査方法

- 1960年代: LOB(BrE)とBrown(AmE)
- 1990年代: FLOB(BrE)とFrown(ArE)
- SPSS for Windowsを使い、log-likelihood scoreを計算する。

### 3. 言語多様性 (Language Variety)

- LOBとBrown(1960): LL score43.435(1自由度) > 臨界値10.83  
有意水準0.000 < P値0.001 → 統計学的に有意
- FLOBとFrown(1990): LL score14.750(1自由度) > 臨界値10.83  
有意水準0.000 < P値0.001 → 統計学的に有意
- 原形不定詞の使用率における、90年代のBrEとAmEの差は、60年代の差ほど大きくない。
- 結論: AmEで多い原形不定詞は、BrEにも急速に広まっている。

## 4. 言語変化 (Language Change)

- 目的: 言語変化が言語使用者の不定詞の選択に起こしうる影響を調査する。

### 調査方法

- イギリス英語: LOB(1960)とFLOB(1990)
- アメリカ英語: Brown(1960)とFrown(1990)
- SPSS for Windowsを使い、log-likelihood scoreを計算する。

## 4. 言語変化 (Language Change)

- LOBとFLOB(BrE): LL score 32.059 (1自由度) > 臨界値 10.83  
有意水準 0.000 < P値 0.001 → 統計学的に有意
- BrownとFrown(AmE): LL score 5.884 (1自由度) > 臨界値 3.84  
有意水準 0.016 < P値 0.05 → 統計学的に有意
- 原形不定詞の使用は、1960年代から90年代にかけて、AmEとBrEともに増えている。BrEは特に顕著。
- 結論: イギリス英語において、原形不定詞への移行は起こっていた。



## 5. 間の名詞句 (an Intervening NP)

- 目的: 間の名詞句の有無と、原形不定詞の頻度の関係を調査する。
- Biber(1999), Lind(1983), Kjellmer(1985):  
原形不定詞は、間に名詞句があるときの方が頻度が高い。

### 調査方法

- SPSS for Windowsを使い、各コーパスでNo NP/With NPの原形不定詞の頻度差のLL scoreを計算する。

## 5. 間の名詞句 (an Intervening NP)

- LOB(BrE 1960): LL score 0.273 < 臨界値 3.84 → 統計学的に有意でない
- FLOB(BrE 1990): LL score 0.560 < 臨界値 3.84 → 統計学的に有意でない
- Brown(AmE 1960): LL score 5.239 > 臨界値 3.84  
有意水準 0.022 < P値 0.05 → 統計学的に有意
- Frown(AmE 1990): LL score 6.819 > 臨界値 3.84  
有意水準 0.009 < P値 0.05 → 統計学的に有意
- 結論: AmEでは、間に名詞句があると原形不定詞の頻度が上がる。  
BrEでは、名詞句の影響は見られない。→ C2.3の結論と一致  
FrownではBrownより原形不定詞が多い → C2.4の結論と一致

## 6. HELPの前の不定詞(the Infinitive Marker Preceding HELP)

- Biber(1999), Lind(1983), Kjellmer(1985):  
HELPの後ろより、to HELPの後ろの方が原形不定詞の頻度が高い。
- 目的: 正規表現を使ったコーパスの検索方法、及びコンコーダンスラインのソート方法を示す。

### 調査方法

- 4つのコーパスを合わせて、MonoConc Pro.で正規表現を検索。
- SPSS for Windowsを使い、log-likelihood scoreを計算する。

## 6. HELPの前の不定詞 (the Infinitive Marker Preceding HELP)

ワイルドカードの意味(正規表現検索)

- ? : 直前の文字が0回もしくは1回
- \* : 直前の文字の0回以上の繰り返し
- . : 任意の1文字
  
- LL score 50.601 > 臨界値 10.83
- 有意水準 < P値 0.001 → 統計学的に有意
  
- 結論 : HELPの前のtoは、後ろに続く原形不定詞の頻度を高める。

## 7. 受動態 (the Passive Construction)

- Palmer(1965): HELPの受動態は後ろにtoをともなって起こる。
- 目的: まれな言語的特徴の頻度情報をどのように解釈するか。

調査方法:

- 4つのコーパスを合わせて分析する。
- MonoConc Pro.で正規表現を検索。
- 頻度が5以下のものがあるため、フィッシャーの正確確率検定を使用。

## 7. 受動態 (the Passive Construction)

- 有意水準 P値=0.012
- →分析結果の信頼度98.8%
- 結論:HELPの受動態は後ろにtoをともなって起こる。

## 8. まとめ

- AmEはBrEより、HELP+原形不定詞を好む。(C2.3)
- 1960~90年代にかけて、AmE・BrEともに原形不定詞の使用増加。(C2.4)
- 間に名詞句が入ると、AmEでは原形不定詞の使用増加。(C2.5)
- to HELPの後ろだと、原形不定詞の使用増加。(C2.6)
- 受動態の後ろは、原形不定詞のみ。(C2.7)